

# 旧品井沼に生きた魚類と漁法及び跡地周辺沼川に残る魚類の比較

NPO 法人シナイモツゴ郷の会 鈴木光太郎

## 1. 品井沼が消滅した経緯と沼で生きた魚類

太古の品井沼は吉田川が流れこむ大きな沼で、水深は1 mないし2 mだが、南北に3 Km 東西に6 Km の面積を持ち、1,800 ha の広さがあった。広大な湿地帯は大雨や台風が来るたびに周辺に大水害を引き起こす。

水害に悩む農民には沼の水を松島の海に流出させる願いがあり、仙台藩主には沼を干拓して米をつくり、江戸に販売する夢があった。

かくて元禄11年(1698)に、品井沼を干拓する元禄排水路が完成し、沼の3分の1に相当する600 ha あまりの水田が拓け沼は半減する。この排水路が老朽化し沼が大きくなった明治時代には、新規の明治排水路が明治43年(1910)に完成し、1,000 ha の広大な田畑が出現した。しかし沼地が完全に消滅するのは河川改修が終了する昭和15年(1940)で、それまではわずかに沼地が残った。

品井沼に生きていた魚が、沼の消滅後はどうなったのか。二つの記録からそれを伺うことができる。



### i) 旧品井沼に生息した魚類

品井沼がわずかに残存していた1931~1934年に品井沼など宮城県で収集した標本に基づいて、Okada et al (1938) が宮城県の淡水魚生息リストを始めて作成し、貴重な資料となっている。30年代が昭和5年(1930)から同14年までと推定すれば、鶴田川が吉田川の下を立体交差する昭和7年~8年のサイフォン工事にあたり、沼がさらに小さくなる工事期を含む。しかし沼の面積が縮小し魚の種類が減少しても、沼に生きた魚類の貴重な記録に変わりはない。1930年代の品井沼の魚類として以下の17種類が記録されてる。

スナヤツメ、コイ、フナ、カマツカ、シナイモツゴ、アブラハヤ、ゼニタナゴ、タナゴ、タビラ、ドジョウ、ホトケドジョウ、シマドジョウ、ナマズ、ギバチ、メダカ、ジュズカケハゼ、ニホンウナギ

### ii) 品井沼跡地に今も生息する魚類

近年は「シナイモツゴ郷の会」などの生き物調査で、品井沼跡地となる志田谷地区に現存する魚類が何度も確認されている。

実は品井沼が消えても、それ以前から近代の人々は沼の魚を近隣のため池に放流していた。ため池は農業用水だけでなく魚の生け簀代わりに利用されており、沼に行かなくとも獲れる貴重な保存食として管理された。

かくて沼が消滅しても、このため池群とこれらを水源とする小河川が、沼に生きた魚類を今日まで生き延びさせた代替え環境となり続けてきた。

品井沼跡地である「志田谷地」地域で確認された魚類は以下の6種類である。

コイ、フナ、ドジョウ、ナマズ、メダカ、ニホンウナギ。

上記1930年代に確認できた17種のうち6種が今も生存していた。また近世に沼の魚を周辺のため池に放流した結果であろうが、周辺里山の「小川」には上記6種に以下の7種を加えた13種の魚が確認されている。

スナヤツメ、シナイモツゴ、アブラハヤ、ゼニタナゴ、タビラ、ギバチ、ジュズカケハゼ、

このほか周辺「ため池」にはシマドジョウも見ることができた。

区分	魚種	沼地の比較		池・川	
		1930年代の品井沼	現在の河川・旧品井沼志田谷地	現在の旧品井沼周辺の里山里地の溜池	現在の旧品井沼周辺の里山里地の小川
	1 スナヤツメ	○	×	×	○
	2 コイ	○	○	○	○
	3 フナ	○	○	○	○
	4 カマツカ	○	×	×	×
	5 シナイモツゴ	○	×	○	○
	6 アブラハヤ	○	×	×	○
	7 ゼニタナゴ	○	×	○	○
	8 タナゴ	○	×	×	×
	9 タビラ(アカヒレタビラ)	○	×	×	○
	10 ドジョウ	○	○	○	○
	11 ホトケドジョウ	○	×	×	×
	12 シマドジョウ	○	×	○	×
	13 ナマズ	○	○	×	○
	14 ギバチ	○	×	○	○
	15 メダカ	○	○	○	○
	16 カジカ	-	-	-	-
	17 ジュズカケハゼ	○	×	○	○
	18 ニホンウナギ	○	○	×	○
	魚種数	17	⇒ 6	9	13

絶滅危惧種を含む多数の魚類を守り続けてきた「旧品井沼周辺ため池群」の果たしてきた役割は大きい。1930年代の宮城県調査にはカジカが記載されているが、カジカは流れの速い河川に生息するので、品井沼などの池沼には生息しない魚類である。また宮城県には農業用ため池が公設・私設あわせて7,000か所あるので、品井沼周辺に限らず他区のため池でも現在絶滅が危惧される魚類が発見される可能性もあり、期待が及ぶ。

## 2. 明治期からの漁法

### i) 品井沼が明治期に漁業解禁

松山茂庭氏の所領であった品井沼も明治期には禁漁・禁猟が解禁となり、品井沼周辺には沢山の漁師が居住した。鹿島台村には専門家が20人、兼業者が160人～200人おり、200艘の舟を持っていたと伝えられている。目的は自給自足と現金収入の他、連年の水害による農業破綻を、魚の販売で補う命綱でもあった。

明治に生きた漕花の斉田やな子さんは、「田んぼは高い所と低いところがあり、水害でも半分は取れた。

しかし低いところばかりの人は水害で収穫が3年に1度。水が出ると男たちは農作業をやめて魚とりに集中した。舟で何杯かの魚を取り、田んぼ以上の収入をあげた。だから水害がある以上、沼のままの方がよかったと思っていた。」（「鹿島台町の文化財」第4集）と話している。

明治30年の「宮城県志田郡鹿島台村地誌」にも、「産物は米穀生糸にして他は河魚なり」とあり、淡水魚の水揚げは主要産業であった。

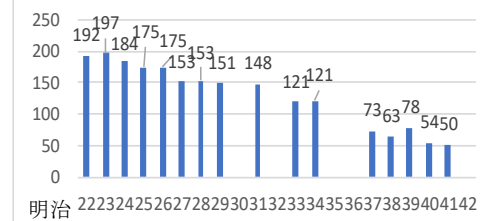
### ii) 品井沼の明治期の漁獲方法

フナはすりみにしたり、出汁にもなる焼魚にしたほか、甘露煮も親しまれ、現金収入にも役立った。フナの漁法には「釣りぶな」（「鹿島台町史」）がある。竹に60cm間隔で針を120本つけて1枚。これを30枚や40枚かける（針が約5,000本）と、ひと朝に150Kgの魚が獲れ

漁業者

明治・年	専業	兼業	漁師	戸数
23	15	200	215	148
24	26	202	228	149
25	20	160	180	130
26	20	160	180	128
27	20	160	180	128

舟数



た。

冬に沼が氷に覆われても、「氷割り」（すがわり）で捕獲（「文化財第5集」）した。深さ1.5mの竹網（簀立（すだて））をV字型に仕掛けておき、氷に穴をあけた頂点のマヤに向かって、氷の上をマサカリで叩き、音や振動で魚を追い込み、サデですくい取る。1回で170貫（640Kg）とれた。聞きつけて集まった行商（かつぎっこ）が相場で買っていく。指揮者は魚を探知できて、人を統率できる人に限られる。「文化財第5集」では次の漁法にも触れている。

「針かけ」は春から夏にかけ、500本くらいの細竹（釣り竿）につけた尻糸となまず針などに、ミミズやヤゴ、小魚を餌に付け、舟で沼にさしていく。あとで引き上げると、良いときで半数近くに魚が食いついていた。

「えび」は秋が好期で、網引き、筒（どう）などで獲る。エビ漬けや干しエビにして、1斗樽につめ、遠くは鳴子や山形まで売りに行った。



「ドジョウ」も筒を使い、つぶしたタニシや匂いのあるニラを中に入れて餌にした。ドジョウ1貫目（約3.7Kg）が50銭の値段で、酒1升到匹敵し、秋の豊漁時には約70貫目をまとめて仲買人に売ったり、氷づけで郡山に送ったりした。寒い冬には水の無くなった地中から掘り出せた。

「ウナギ」は針かけで獲った。またうなぎ搔きを使って、搔き上げる方法は壮観な漁法として知られ、全長約5mの舟一艘で1日に500匹から800匹を搔きあげた。豊漁のときは沢の小堀で、土を掘り返してもウナギがとれた。明治の渚花にはウナギ屋があり、百匁（375g）串2本のウナギに2合5勺のお酒がついて15銭（今の600円）であった。



### iii) 近隣の南郷での漁法

参考までに昔の鹿島台町と隣接し、交流も深かった南郷町に存在した名鱸沼は、「南郷町史」によれば南北1.7Km、東西2.4Km、面積186haの淡水魚の宝庫であり、昭和40年代前半の干拓工事で消滅し水田となった。昭和31年から40年までの、簀立（すだて）漁獲の実績では、コイ、フナ、ナマズ、ライギョ、ザリガニ、カニが主要な獲物であった。鹿島台とも共通するであろう。ここでの漁法は、次の通りである。

ドジョウは雨天に泳ぎ回る習性があるので、網やドジョウ筒（どう）で大量にとれた。ナマズは夜行性なので、ミミズやカエルを釣り針にかけ、篠竹に1mの糸を結び、夜に堀や、川、沼の魚道にさしておき捕る。また夕方、釣り竿に長い糸で小ガエルを結び、藻の上をあたかも虫が飛

び跳ねているように操りながら吊り上げる。なまずは3年たてば50cmに成長した。ウナギも夜行性で針竹（はりだけ）を使うが、大量に水揚げするときは網をもちいる。



### 最後に

品井沼に生きた魚類について、大正以前の資料は探せなかったが、昭和初期の調査記録と、現在の小河川やため池の記録から、減少した種類と存続している種類の一端を知ることができた。漁獲方法も多種にわたり工夫が凝らされている。

沼が消えても小魚の存続を守ってくれたため池の働きを、多くの人々の理解で継続し、多様な生態系が将来も続くことが望まれていると思う。

### 引用文献

Okada & Ikeda (1938)、町史わが鹿島台 (1971)、鹿島台町史 (1994)、宮城県志田郡鹿島台村地誌 (1897)、鹿島台の文化財 (各誌 1978~1994)、南郷村史 (1941)、南郷町史 (1985)、よみがえる魚たち (2017)